

『詩伝通釈』の研究 ―『毛詩正義』への認識を中心に―

王 瑞

キーワード 『詩伝通釈』 『詩集伝』 『毛詩正義』 詩経解釈学

一、はじめに

『詩伝通釈』（以下『通釈』）は元の劉瑾が編纂した宋の朱熹の

『詩集伝』（以下『集伝』）の注釈書である。劉瑾は正史である『元史』などにも記載がなく、伝記資料に乏しいが、『吉安府志（万曆）』

によれば、経学、特に『詩経』に深い造詣を有した人物のようである（一）。『四庫全書総目提要』には、劉瑾が朱熹の学統を受け継いでおり、そのため、劉瑾が編纂した『通釈』は『集伝』をわかりやすく説明している本であると言う（二）。『通釈』が元代に於いて流

布していたという資料は管見の及ぶ限り見当たらないが、『通釈』は元代以後の詩経解釈に大きな影響を与えていると考えられる。たとえば、『通釈』に見られる、『集伝』の全文を引用して注釈をする手法は明代の詩経学者に吸収されている（三）。さらには、『通釈』は明代の『詩経』教科書である『詩伝大全』の藍本として（四）、

詩経解釈の中心を占めた。『通釈』に関する先行研究は、専ら『通釈』の詩経解釈の相貌を探る方向に力が注がれている。その考察は主に以下の諸点に向かっている（五）。

- 一、詩の章節間の関連性及び詩篇間の関連性の重視。
- 二、「性」、「理」の思想を通じた解釈の試み。
- 三、考証による詩義の解明。

しかし、これらを総じて、『通釈』に関する学術とその学術的価値をすべて検討・確認しえたわけではない、新たな角度から検討する余地も残されている。それはたとえば、漢唐詩経解釈学の継承という視点である。

元代までの詩経解釈学は、大きく漢唐詩経解釈学、宋代詩経解釈学に分けられる（六）。『詩経』の詩篇及び詩篇の前に付されている小序に対し、様々な学者が注釈を行った。前漢の毛亨、毛萇は『詩経』に注釈を施し、『毛詩故訓伝』（以下『毛伝』）を著し、後漢の

鄭玄は新たに注釈を加え『毛詩伝箋』（以下『鄭箋』）を著した。唐の孔穎達などは詩序、『毛伝』、『鄭箋』を個別のかつ総合的に解説し、様々な再注釈（義疏）をした『毛詩正義』（以下『正義』）を編纂した。

宋に入ると、前儒の経学を批判する風潮が起こり、『詩経』の解釈も新たな様相を呈する。この時期の詩経学者は従来の注疏に存する穿鑿の弊に満足せず、漢唐詩経解釈学の桎梏から脱し新たな解釈を生んだ。朱熹は『集伝』を編纂し、宋代詩経解釈学の成果を集大成した。元に於いては、『集伝』は官吏登用制度である科挙の標準解釈となり、大きな権威を持つに至った。

元代の詩経解釈は『集伝』の権威となった経説の妥当性を証明することを旨としており、そのために元代の詩経学者の独自の思考が不明瞭となっている。しかし、注釈すべき箇所判定、注釈手法の採用など、注釈者である元代の詩経学者の思考が反映されていると思われる。元代の詩経学者の思考は彼らが生きた時代の常識や思潮を反映したものである。また、明末に入ると、詩経解釈学が『毛伝』・『鄭箋』の解釈に回帰するようになった。元代の詩経解釈学は詩経解釈の転換において、どのように位置づけるのかというテーマは詩経研究に関する大きな課題である。

本論は『通釈』と漢唐詩経解釈学の関係性について検討する。まず、『通釈』の注釈する対象である『集伝』と漢唐詩経解釈学との関係性を確認する。『集伝』と漢唐詩経解釈学の関係は断絶的なも

のではなく、二つの詩経解釈の間には密接なつながりが存在している。たとえば、『集伝』は漢唐詩経解釈を批判しつつも、『毛伝』と『鄭箋』の解釈をそのまま流用したものが多^(七)い。『通釈』は、その『集伝』を注釈したものであるから、自ずと、『毛伝』・『鄭箋』の詩経解釈を基本として再注釈を施した『正義』を数多く引用することになる。劉瑾にとって、『正義』は詩経解釈に資する古文獻や資料を多く載せる巨大な宝庫であったことは言うまでもない。従って、『通釈』は『正義』の詩経解釈をどのように認識しているか、『通釈』は『正義』をどのように吸収して『集伝』を注釈するかという問題について、改めて検討する必要がある。

本研究は劉瑾が『集伝』に注釈する実例を分析する。具体的には、字義の解釈、詩意の解説、修辞手法である「興」の説明という三つの側面から、『通釈』が『正義』の詩経解釈をどのように活用しているかを検討し、劉瑾の詩経解釈の方法論を明らかにしたい。本稿は元代の詩経解釈について、従来と異なる視点からの解答を提示するものである。

本稿に於ける『通釈』のテキストは李山の校点本（北京師範大学出版社、二〇一三）を用いる。また、『集伝』のテキストは趙長征の校点本（中華書局、二〇一七）を用いる。『正義』のテキストは『重刊宋本毛詩注疏附校勘記』嘉慶二十年南昌府学刊本影印本（台湾商務印書館、一九九三）を用いることとする。

二、字義の解釈に於ける『正義』の継承

二・一、『正義』の説に従う場合

本章は字義の考証に於いて『集伝』の訓詁を解釈する際に、『通釈』が『正義』をどのように引用しているかを検討したい。

小雅「菁菁者莪」の第三章の

既見君子、錫我百朋

既に君子を見れば、我に百朋を錫ふ。

の句に、『鄭箋』は「古は貝を貨とし、五貝を朋と為す（古者貨貝、五貝為朋）」と言う。

しかし、『鄭箋』の解釈と異なる説もある。『漢書』「食貨志下」では貝を二枚で一朋としている。『漢書』「食貨志下」には、次のようにある。

大貝四寸八分以上、二枚为一朋、直二百一十六。壮貝三寸六分以上、二枚为一朋、直五十。公貝二寸四分以上、二枚为一朋、直三十。小貝寸二分以上、二枚为一朋、直十。不盈寸二分、漏度不得为朋、率枚直钱三。是为贝货五品。

大貝は四寸八分以上、二枚を一朋と為し、直は二百一十六に。壮貝は三寸六分以上、二枚を一朋と為し、直は五十。公貝

は二寸四分以上、二枚を一朋と為し、直は三十。小貝は寸二分以上、二枚を一朋と為し、直は十。寸二分に盈たず、漏度して朋を為すを得ざるものは、率（おおむ）一枚ごとに直は钱三。是れ貝貨五品と為す。

これら二説に対し、『正義』は次のように『鄭箋』と『漢書』との一見相容れない関係を解消した。

五貝者、漢書食貨志以為大貝、壮貝、公貝、小貝、不成貝為五也。言為朋者、為小貝以上四種、各二貝为一朋、而不成者不為朋。鄭因經広解之。言有五種之貝、貝中以相与為朋。非総五貝为一朋也。

五貝は、漢書食貨志以為へらく大貝、壮貝、公貝、小貝、不成貝を五と為すと。言ふところは朋と為す者は、小貝以上の四種と為し、各々二貝を一朋と為して、成らざる者は朋と為さずと。鄭は經に困りて広く之を解く。言ふところは五種の貝有り、貝の中に相ひ与するを以て朋と為すと。五貝を総じて一朋と為すに非ざるなり。

『正義』は『鄭箋』に「五貝為朋」と言う理由について、大貝、壮貝、公貝、小貝、不成貝(八)の五種類の貝の中に、貝を組にして、一朋と数えるためであるとし、また、『漢書』の「二貝为一朋」と

いう説を引用し、大貝、壯貝、么貝、小貝をそれぞれ二個ずつ組にして一朋と数えることができることを言う。換言すれば、『鄭箋』の言う「五貝一朋」の「朋」は、五種類の「貝」のうち二種類を組み合わせたものを指し、『漢書』に言う「二貝一朋」の「朋」は、五種類の「貝」のうち同種類の「貝」を二枚組み合わせたものを指す。『鄭箋』の解釈では五種類の「貝」のうち同種類の貝を二枚組み合わせたものも「朋」に含まれ、この点では『漢書』の説と一致する。『鄭箋』は『漢書』の説よりも「貝」を広義に解釈しているだけであって、両説は矛盾するものではないとする。『正義』の解説によれば、『鄭箋』と『漢書』とは異なる視点から説明しているに過ぎず、実際には食い違わないとする。

「菁菁者莪」の第三章にある「錫我百朋」の「朋」を、『集伝』は「古は貝を貨とし、五貝を朋と為す（古者貨貝、五貝為朋）」と解釈し、『鄭箋』の説を流用しているが、『鄭箋』と『漢書』の解釈の異なりには言及していない。一方、『通釈』は「孔氏曰く、漢食貨志以為へらく、大貝、壯貝、么貝、小貝、不成貝を五と為すなりと。朋と為す者は、小貝以上の四貝、各々二貝を一朋と為して、成らざる者は朋と為さざるを謂ふ。鄭経に因りて広く之を解く。言ふところは五種の貝有り、其中相ひ与するを以て朋を為すと、五貝を総じて一朋を為すに非ざるなり（孔氏曰く、漢食貨志以為、大貝、壯貝、么貝、小貝、不成貝為五也。為朋者、謂小貝以上四貝、各二貝為一朋、而不成者不為朋。鄭因経広解之、言有五種之貝、其中以

相与為朋、非総五貝為一朋也）」と、『正義』の解釈を忠実に引用した。『正義』を引用していることから、『通釈』は『正義』の問題意識を継承し、「五貝為朋」の解釈と『漢書』の「二貝為一朋」の解釈の食い違いを解説すべき問題であるとしていることがわかる。

「朋」の解釈について、『集伝』は『鄭箋』の説のみを流用している。『正義』は『鄭箋』の「五貝為朋」の訓詁に対し『漢書』との異同について論証を試みている。『通釈』は『正義』の論証を用しつつ、『集伝』の注釈を敷衍した。しかし、『通釈』は『正義』を単純に引用するのみに終始するわけではない。次は『通釈』が『正義』の説明を補う場合について検討をしたい。

二・二、『正義』の説を補う場合

周南「兔置」の第一章および、第一章の初二句について、『毛伝』と『集伝』の解釈は次の通りである。

肃肃兔置、椽之丁丁。赳赳武夫、公侯干城。

肃肃たる兔置、之れを椽つこと丁丁たり。赳赳たる武夫は、公侯の干城なり。

【毛伝】 肃肃、敬也。兔置、兔罟也。丁丁、椽杵声也。

肃肃は敬（うやま）ふなり。兔置は兔罟なり。丁丁

は杙を椽（う）つ声なり。

【集伝】 肅肅、整飾貌。置、罨也。丁丁、椽杙声也。

肅肅は整飾する貌。置は罨なり。丁丁は杙を椽つ声なり。

まず、「丁丁」の解釈について、『集伝』が『毛伝』をそのまま流用しているのは明らかである。

『毛伝』の「丁丁は杙を椽つ声なり（丁丁、椽杙声也）」という訓詁について、『正義』では以下のように言う。

【正義】 积宮云、楸謂之杙。李巡云、杙謂槩也。此丁丁連椽之、故知椽杙声。故伐木伝亦云、丁丁、伐木声。

积宮に云ふ、楸は之れを杙と謂ふと。李巡云ふ、杙は槩を謂ふなりと。此の「丁丁」は「椽之」に連なり、故に杙を椽つ声なるを知る。故に伐木の伝も亦た云へらく、丁丁とは、木を伐つ声なりと。

『正義』はまず『爾雅』「积宮」と李巡の注釈を引用し、『毛伝』の「丁丁、椽杙声也」の中の「杙」を解釈した。その上で、「丁丁」という語は「椽之」の語につながっているので、「丁丁」という擬声語は杙を椽つ声であるとする。『正義』は以上のように、『毛伝』が「丁丁」を解釈した理由を示す。『正義』の最後には、小雅「伐

木」の「木を伐つこと丁丁たり（伐木丁丁）」の句に対し、『毛伝』の「丁丁とは、木を伐つ声なり（丁丁、伐木声）」という訓詁を引用し、「丁丁」は木を伐つ音だと解釈する例を補足している。

『通釈』は以下のように『正義』の解釈を引用し、『集伝』の「丁丁、椽杙声也」に注釈をしている。

【通釈】 孔氏曰、杙謂楸也。此丁丁連椽之、故知椽杙声。嚴氏曰、椽伐杙楸之声。

孔氏曰く、杙は楸を謂ふなり。此の「丁丁」は「椽之」に連なり、故に杙を椽つ声なるを知ると。嚴氏曰く、杙楸を椽伐する声なりと。

『通釈』は『正義』を「孔氏曰」以下に引用し、「丁丁、椽杙声」と訓詁する理由を示す。最後に、宋の嚴粲の『詩緝』の「椽伐杙楸之声」^(九)という説を補充した。『通釈』は『正義』の解釈を引用した上で「椽杙」の「椽」を「椽伐」に、「杙」を「杙楸」に、二音節語を用いて、『正義』と同趣旨の説を唱えている『詩緝』の解釈をさらに引用して^(十)、『集伝』の解釈を補強していると言える。

『集伝』が『毛伝』の訓詁を流用している箇所について、『通釈』は『正義』を引用して『集伝』の解釈を敷衍したが、『通釈』は『正義』の注釈の内容と注釈の手法のすべてを沿襲しているわけではない。『通釈』は漢唐の詩経解釈を引用した上で、宋代の詩経解釈

までも引用している。このことから、『通釈』は唐宋諸説をあまねく集めて注釈していることがわかる。

『通釈』と『正義』との関係は本節で示した通り、直接的な影響だけに留まらない。次節では、『通釈』が『正義』と同じ認識を持っていながらも、『正義』と異なる説を唱えている例について、検討をしたい。

二・三、『正義』と異なる説を提起する場合

周南「関雎」の第一章の「雎鳩」に対し、『毛伝』・『鄭箋』・『正義』の解釈は以下のものである。

関雎雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。

関雎たる雎鳩、河の洲に在り。窈窕たる淑女、君子好逑なり。

【毛伝】 雎鳩、王雎也、鳥摯而有別。

雎鳩とは王雎なり、鳥摯にして別有り。

【鄭箋】 摯之言至也。謂王雎之鳥、雌雄情意至、然而有別。

摯の言は至なり。王雎の鳥は、雌雄の情意至るも、然れども別有るを謂ふ。

【正義】 伝為摯字、実取至義。故箋云、摯之言至、王雎之鳥

雄雌情意至、然而有別。所以申成毛伝也。

伝摯の字に為るは、実に至の義を取るなり。故に箋

に云へらく、摯の言は至なり、王雎の鳥、雄雌の情意至るも、然れども別有りと。毛伝を申べて成す所以なり。

『毛伝』は「雎鳩」という鳥について、「王雎也、鳥摯而有別」と言う。これを敷衍して、『鄭箋』は「摯」が「至」の音通であると解釈する。『正義』は①『毛伝』の解釈（「伝為摯字、実取至義」）、②『鄭箋』の解釈（「故箋云、摯之言至、王雎之鳥、雄雌情意至、然而有別」）を引用し、③鄭箋が『毛伝』の解釈を引き伸ばしたものである（「所以申成毛伝也」）と述べ、『正義』は『鄭箋』の解釈が『毛伝』を敷衍しているものとしていて、『毛伝』と『鄭箋』との解釈を同じ趣旨のものとして解釈しようとしている。

一方、朱熹は『集伝』に、以下のように、『毛伝』の「鳥摯而有別」という解釈を引用した。

雎鳩、水鳥、一名、王雎。状類鳧鷖。今江淮間有之、生有定

偶、而不相乱、偶常並遊而不相狎。故毛伝以為摯而有別：毛伝（十二）云、摯字与至通、言其情意深至也。

雎鳩は水鳥なり、一名、王雎なり。状は鳧鷖に類す。今江淮の間に之れ有り。生れながらにして定偶有りて、相乱れず、偶常に並び遊びて相狎れず。故に毛伝以為へらく摯にして別有り：毛伝云へらく、摯字と至と通じ、其の情意深く至るを言

ふなりと。

『集伝』は「雉鳩」という鳥について、『毛伝』の「摯而有別」を引用して、さらに『鄭箋』を踏まえ、『毛伝』を説明した。

『通釈』は以下のように『集伝』を解釈している。

愚按、摯、至字古通用。如商書大命不摯。曲礼庶人之摯亦訓為至。故鄭氏云、摯之言至也。謂鳥雌雄情意至然、而有別也。

愚按ずるに、摯は至の字と古通用す。商書の「大命に摯らざるが如し。曲礼の庶人の摯るも亦た訓じて至ると為す。故に鄭氏云へらく、摯の言は至なり。鳥は雌雄の情意至るも、然れども、別有るを謂ふなり。

『通釈』はまず「摯」と「至」との通用について、「大命不摯」(十二)と「庶人之摯」(十三)という二例を挙げ、いずれも「摯」を「至」と訓ずることを示し、「摯」と「至」の通用について考証を加えている。この考証によって、『鄭箋』のいう、「摯」と「至」が通用しているという説は正しいと主張するのである。

ここで注目したいのは、『通釈』は『正義』と同様に、『鄭箋』はどうして「摯」と「至」とが通じると解釈しているかという問題意識を持っている可能性がある点である。『正義』は『鄭箋』の解釈は『毛伝』を解釈しているものとして捉えており、『毛伝』と『鄭

箋』とを一続きなものと考えた。一方、『通釈』は『正義』の説を取らないで、独自の考証を通して、『鄭箋』の根拠を補充した。

もう一つ、唐風「采芩」の第一章の例を挙げてみよう。

采芩采芩、首陽之巔。

芩を採り芩を採る、首陽の巔に。

の句に対し、『集伝』は「首陽、首山之南也（首陽は、首山の南なり）」のように、「首陽」を「首山の南」と解釈した。

『集伝』の訓詁に対し、『通釈』は以下のように解釈をした。

孔氏曰、首陽在河東蒲坂南。李迂仲曰、亦名雷首山。愚按集伝以首為山名、陽為山之南。春秋伝亦曰、趙宣子田于首山。然此詩下章又云、首陽之東、則似首陽二字同為山名。論語集注亦嘗指首陽為山名矣、豈泛名其山、則曰首山、主山南而言、則又獨得首陽之稱乎。

孔氏曰く、首陽は河東の蒲坂の南に在りと。李迂仲曰く、亦た雷首山と名づく。愚按ずるに、集伝は首を以て山名と為し、陽を山の南と為す。春秋伝に亦た曰く、趙宣子首山に田すと。然れども此の詩の下章も又た首陽の東と云へば、則ち首陽の二字同じく山名と為すに似る。論語集注も亦た嘗て首陽を指して山名と為すなり。豈に泛く其の山を名づけければ、則ち首

山と曰ひ、山の南を主として言へば、則ち又た独だ首陽の称を得んや。

『通釈』は『正義』から「首陽」を山の名とするという『集伝』と異なる説を引用した。そして、二つの説に対し、『通釈』はまず、『春秋左氏伝』「宣公二年」「宣子首山に田す（宣子田於首山）」の例を引用し、「首山」が山の名を示すである用例を挙げた。次に、『通釈』は唐風「采芑」の第三章の「芑を采り芑を采る、首陽の東に（采芑采芑、首陽之東）」の文面によれば、「首陽」は山の名である可能性があると推測した。さらに、『通釈』は朱熹の著作である『論語集注』にも「首陽」を山の名とすることが存在する（^五）と指摘した。最後に、『通釈』は「首山」は泛称であり、「首陽山」は山の南を強調する名称であり、「首山」と「首陽山」の解釈の異なりは視点によるものであるという結論に達した。

『通釈』は『正義』と同じく「首陽」を山の名とし、この点では『正義』の説を取り込んでいるが、『正義』をそのまま踏襲するのではなく、『正義』の解釈を踏まえたうえで、自分の考証を加えて新たな説を唱えている。

以上の両例のように、『通釈』と『正義』とは同様な問題意識を持っていてと考えられるが、『通釈』は『正義』にそのまま従うわけではなく、自分の考証を例示によって説明するという方法を採用していることがわかる。

『通釈』の『正義』に対する取捨は字義の考証に関する問題について見られるだけではない。次章は『正義』の詩意の解説について、『通釈』の受容を検討したい。

三、詩意の解説に於ける『正義』の継承

齊風「鷄鳴」は哀公の荒淫怠慢なるによって、その過ちを救い夙夜相警める賢妃を思つて作った詩とされている（^{十四}）。

齊風「鷄鳴」の第一章に見える経文

鷄既鳴矣、朝既盈矣。匪雞則鳴、蒼蠅之声。

鷄は既に鳴けり、朝は既に盈てり。雞の則ち鳴くに匪ず、蒼蠅の声なり。

に対し、『集伝』は次のように言う。

言古之賢妃御於君所、至於将旦之時、必告君曰、雞既鳴矣、会朝之臣既已盈矣。欲令君早起而視朝也。然其实非雞之鳴也、乃蒼蠅之声也。蓋賢妃当夙興之時、心常恐晚、故聞其似者而以爲真。非其心存警畏而不留於逸欲、何以能此。故詩人叙其事而美之也。

言ふところは古の賢妃君の所に御め、将に且ならんのに

至り、必ず君に告げて曰く、雞既に鳴けり、会朝の臣既に盈てりと。君をして早起して朝を視せしめんと欲するなり。然れども其の実は雞の鳴くに非らざるなり、乃ち蒼蠅の声なり。蓋し賢妃は夙興の時に当たり、心常に晩きを恐るるが故に、其の似る者を聞きて以て真と為す。其の心警畏を存して逸欲に留らざるに非らざれば、何を以てか此れを能す。故に詩人其の事を叙べて之れを美むるなり。

『集伝』は「鶏鳴」の第一章が、賢妃が欲に溺れずに、つつしみおそれることを褒めると解釈している。『通釈』は『集伝』の「故詩人叙其事而美之也」の後に、以下のように『正義』を引用した。

孔氏曰、以其君荒淫、無賢妃之助故、陳賢妃、貞女警戒其君之語。

孔氏曰く、其の君荒淫にして、賢妃の助け無きを以ての故に、賢妃、貞女の其の君を警戒するの語を陳ぶ。

『正義』は「鶏鳴」を、詩人が貞女のことを述べることを通して、君を戒めるものと解釈をしている。『通釈』は『正義』を引用し、賢妃を褒めることと君を戒めることという両方から解釈し、詩意の説明を『正義』の引用によって完成させた。このことから、『通釈』は前章で見たように字義の考証に関して『正義』の説を参考す

るに止まらず、詩意の解説にも『正義』の説を取り入れたことがわかる。

もう一つ、邶風「北門」の第一章の例を挙げてみよう。邶風「北門」は衛国の忠臣が自身の不遇を風刺する詩である。

「北門」の第一章にみえる経文

出自北門、憂心殷殷。終窶且貧、莫知我艱。已焉哉、天実為之、謂之何哉。

北門より出で、憂心殷殷たり。終（か）つ窶しく且つ貧しく、我が艱を知る莫し。已んぬるかな、天実に之を為し、之を何と謂はんや。

に対し、『集伝』は以下のように言う。

衛之賢者、処乱世、事暗君、不得其志。故因出北門、而賦以自比。又歎其貧窶人莫知之、而帰之於天也。

衛の賢者、乱世に処り、暗君に事へて、其の志を得ず。故に北門を出づるに因りて、賦して以て自ら比す。又其の貧窶にして人の之れを知ること莫きを歎じて、之を天に帰するなり。

『集伝』は衛国の賢者は乱世におり、暗君に仕え、不遇である故に、北門を出ることによって、自分をたとえると解釈している。し

かし、賢者の身世及び北門を出ることが比喩表現に於いてどのような類似性を持っているかについては、『集伝』は明確な解答を与えていない。

一方、『通釈』は以下のように『正義』を引用した。

孔氏曰、言出自北門、背明向陰而行、猶居乱世嚮暗君而仕也。

孔氏曰く、北門より出で、明に背にし陰に向ひて行くは、猶ほ乱世に居り暗君に嚮ひて仕ふるがごときを言ふなり。

『正義』は北門を出ることについて、明に背を向けて陰に向かうことは乱世に暗君に向かって仕えるようなものであり、北門を出ることは詩人の身世との類似性を指摘して解釈している。『通釈』は『正義』を引用して、『集伝』が説明し尽くしていないものをわかりやすく説明している。

『通釈』は詩人の表現意図の解明に於いても、『正義』の解釈を継承していることがわかる。

しかし、『通釈』は必ずしも『正義』の内容を忠実に引用するわけではなく、『正義』の本意を外れ、自分の解釈に有用の部分を取り取って利用する場合もある。

四、『正義』の部分的引用―「興」の解釈をめぐって

「興」は『詩経』の「六義」の中の一つであり、詩の技法として最重要視され、その意味をめぐって、古くから様々な説が唱えられてきた。「興」に対し、漢唐の詩経解釈と朱熹の詩経解釈とは異なる解釈がなされている。『毛伝』、『鄭箋』、『正義』の解釈はAがBを比喩するという構造モデルを採用している^(十六)。一方で、朱熹は「興」を比喩も含めて多義的なものと認識している^(十七)。では『通釈』ではどのような解釈がなされているのだろうか。本章では『通釈』に於ける「興」の解釈について、『正義』の文脈から外れて、引用する例を検討したい。

邶風「谷風」の詩は夫に捨てられた婦人が悲しみを叙述する詩とされている。詩の第四章は語り手の女性が君子の家事に勤勉に努めたことを自ら述べている箇所である。以下に『毛伝』の訓詁とともに示そう。

就其深矣、方之舟之。就其浅矣、泳之游之。何有何亡、黽勉求之。凡民有喪、匍匐救之。

其の深きに就かば、方(いかだ)し、舟(ふね)す。其の浅きに就かば、泳し、游す。何か有り何か亡く、黽勉して之を求む。凡そ民に喪有れば、匍匐して之を救ふ。

【毛伝】 舟、舩也。有、謂富也。亡、謂貧也。

舟は舩なり。有は富むを謂ふなり。亡は貧しきを謂

ふなり。

『正義』は『毛伝』の訓詁に基づいて、以下のように詩意を解説した。

毛以為、婦人既怨君子棄己、反追説己本勤勞之事。如人之渡水、若就其深矣、則方之、舟之、若就其浅矣、則泳之、游之、随水深浅、期於必渡。以興己於君子之家事、若值其難也、則勤之勞之、若值其易也、即優之、游之、随事難易、期於必成。匪直於君子之家、事無難易。又於君子之家、財業何所富有乎、何所貧無乎。不問貧富、吾皆勉力求之。

毛以為へらく、婦人既に君子の己を棄つるを怨み、反て己の本勤勞なるの事を追説す。人の水を渡るが如きは、若し其の深きに就かば、則ち方し、舟し、若し其の浅きに就かば、則ち泳し、游し、水の深浅に随ひ、必ず渡るを期す。以て己は君子の家事に於いて、若し其の難しきに値らば、則ち勤め、勞め、若し其の易きに値らば、即ち優せ、游せ、事の難易に随ひて、必ず成すを期するを興す。直に君子の家に於いて、事に難易無きのみに匪ず、又た君子の家に於いて、財業何の富有るの所なるか、何の貧無きの所なるか。貧富を問はず、吾皆な勉力して之れを求む。

『正義』は「興」を、水の深浅によって、異なる渡り方をするとして、必ず家庭内の事柄をうまく処理することを比喻するものであると解釈している。その中で、水の深浅が事の難易を比喻し、「方」、「舟」、「泳」、「游」などの水を渡る方法が「勤」、「勞」、「優」、「游」などの家事を処理する方法を比喻する。

『集伝』はこの章の詩義を「婦人自ら其の家を治め勤勞なるの事を陳ぶ。言ふところは、我事に随ひて其の心力を尽して之を為す。深ければ則ち方舟し、浅ければ則ち泳游し、其の有ると亡きとを計らずして、強勉して以て之を求む。又た周く其の隣里郷党に睦まじく、其の道を尽さざる莫きなり（婦人自陳其治家勤勞之事。言我随事、尽其心力、而為之。深則方舟、浅則泳游。不計其有与亡、而勉強以求之。又周睦其隣里郷党、莫不尽其道也）」と解釈した。詩義に関しては『正義』と同じであるが、「興」という技法に関してどのように解釈したのか『集伝』は具体的な説明を欠いている。そこで、『通釈』は『集伝』の引用に続けて言う。

ここに示した『集伝』の引用に続き、『通釈』は以下のように言う。

孔氏曰、随水深浅、期於必渡、猶随事難易、期於必成。不問貧富、吾皆勉力求之。愚按深浅以興有亡。方、舟、泳、游以興勉求也。

孔氏曰く、水の深淺に随ひて、必ず渡るを期すこと、猶ほ事の難易に随ひて、必ず成すを期するが如し。貧富を問はず、吾皆な力を尽して之を求む。愚按ずるに、深淺以て有亡を興す。方し、舟し、泳し、游する以て勉求するを興すなり。

『通釈』は水の深淺が物の有無を喩え、また、「方」、「舟」、「泳」、「游」などの水を渡る方法が物の有無に関わらず努めて家を整えようと努力することを喩えるとしている。このように「興」の内容について『正義』と異なる解釈をしている。

そのため、『通釈』は『正義』の全文を引かずに、『正義』の「水深淺、期於必渡」、「随事難易、期於必成」という部分だけを取り出した。『通釈』は『正義』が異なる解釈をしている箇所は採用せず、『通釈』自身の解釈と食い違がない部分だけを取捨選択して引用したことがわかる。

もう一つ、小雅「常棣」の第一章の例を挙げてみよう。

常棣之華、鄂不韡韡。凡今之人、莫如兄弟。

常棣の華、鄂不（あ）に韡韡たらざらんや。凡そ今の人、兄弟に如くは莫し。

【毛伝】 常棣、棣也。鄂猶鄂鄂然。言外発也。韡韡、光明也。

常棣は棣なり。鄂は猶ほ鄂鄂然の如し。外に発する

を言ふなり。韡韡は光明なり。

【正義】 毛以為、常棣之木、華鄂鄂然外発之時、豈不韡韡而光明乎。以衆華俱発、実韡韡而光明、以興兄弟衆多而相和睦、豈不強盛而有光暉乎。

毛以為へらく、常棣の木、華鄂鄂然として外に発するの時、豈に韡韡として光明ならざらんや。衆華俱に発するを以て、実（まこと）に韡韡として光明なり。以て兄弟衆多にして相和睦するを興す。豈に強盛にして光暉有らざらんやと。

『正義』は『毛伝』を代弁して、「常棣」の第一章の「興」を、数多くの花がともに咲いて、明るく花開いていることは、兄弟が多く、しかも仲が良いことを比喻するとしている。

一方で、詩の第一章に対し、『集伝』は以下のような解釈をしている。

興也。常棣、棣也。子如桜桃。可食。鄂、鄂然外見之貌。不、

猶豈不也。韡韡、光明貌。此燕兄弟之楽歌。故言、常棣之華、則其鄂然而外見者、豈不韡韡乎、凡今之人、則豈有如兄弟者乎。

興なり。常棣は棣なり。子は桜桃の如し。食ふ可し。鄂は鄂然として外に見（あら）はるの貌なり。不は猶ほ豈不のごときなり。韡韡は光明の貌なり。此れ兄弟を燕するの楽歌なり。故

に言ふ、常棣の華は則ち其の鄂然として外に見（あら）はるもの、豈に鞞鞞たらざらんや。凡そ今の人は則ち豈に兄弟の如き者有らざらんやと。

「鄂」及び「鞞鞞」については、『集伝』は『毛伝』と同じ訓詁をしている。一方で、「興」の解釈について、『集伝』の解釈には『毛伝』・『正義』の兄弟が多くいて、しかも仲が良い、という内容が見られない。『正義』と『集伝』との不一致に対し、『通釈』は次のように『正義』を引用して『集伝』を敷衍した。

孔氏曰、毛伝以為、常棣之木、衆華俱發、實鞞鞞而光明、故以興兄弟。

孔氏曰く、『毛伝』以為へらく、常棣の木、衆華俱に発し、実に鞞鞞として光明たり、故に以て兄弟を興すと。

『通釈』は『正義』の内容を断片的に引用し、『集伝』に言及されていない内容は回避している。『集伝』の解釈に合わせるために、正義の「興」の解釈を無視して、『正義』が毛伝を敷衍して解釈した常棣の花がともに明るく花開いていることが兄弟を比喻するという部分のみを引用している。この注釈からは、『通釈』は『正義』の内容を自分の説に沿う箇所のみを、自説に引き付けて取捨選択していることがわかる。

五、終わりに

以上、『通釈』が『集伝』を解釈する際に『正義』を引用して自説をのべることについて、字義の解釈、詩意の解説、「興」の説明という三つの側面から考察してきた。

まず、『通釈』は『正義』の詩経解釈の成果を『集伝』の解釈に取り入れたことがわかった。劉瑾は『正義』と『集伝』には密接な関係があったものとしていることが明らかになった。字義の考証について、『通釈』は『正義』の訓詁を踏襲したうえで、独自の注釈手法を形成したことがわかった。『通釈』は『正義』の注釈と宋代の解釈を併用し、歴代の諸説を集めて『集伝』の補強をした。さらに、『集伝』が『鄭箋』を踏まえた解釈を行った妥当性を説明するために、『通釈』は『正義』の説を踏襲しないで、自分の考証によって説明する方法を採っていることがわかった。また、詩の詩意の解説に於いて、『通釈』は『正義』の解釈を利用し、『集伝』が明確にしていない部分を説明したことがわかった。

「興」の解釈に対し、『通釈』は『正義』と自分の解釈と食い違う内容を一律に排除するのではなく、自分の解釈と相容れるところを断片的に利用し、自分の解釈に引き付けるといった注釈方法を試みた。

『通釈』の解釈は、『集伝』を尊崇する一方、漢唐の詩経解釈学

をすべて退けたのではなく、むしろ、漢唐の詩経解釈と朱熹の詩経解釈との差異を明確にした上で、両者の解釈の相似たるところを融合させて、『集伝』の解釈の妥当性を証明している。『通釈』は漢唐の詩経解釈と朱熹の詩経解釈の共通点に着目し、朱熹の解釈を基礎として、漢唐の解釈を積極的に朱熹の解釈に入れたという新たな注釈手法を確立したのである。

最後に、『通釈』は輔広の『詩童子問』、嚴粲の『詩緝』、及び呂祖謙の『呂氏家塾讀詩記』などの宋代の詩経解釈書から、宋代の詩経学者の説を数多く取り入れたことを附言しておく。『通釈』に於ける宋代の詩経解釈の受容と漢唐の詩経解釈の受容の異同はどのような意味を持っているかを今後の課題にしたい。

注

- (一) 劉瑾とその著作については、『吉安府志(万曆)』には次のような記述がある。
- 劉瑾、安福人。淹貫經史、留心史学、晚更肆力治詩。其說宗朱子、而間出其所自得。又考正諸國世次、作者時世、察其源流、弁其音韻。審詩樂之合、窮刪定之由。為詩伝通釈、能闡發朱子之蘊、纂修大全多採入焉。(卷二十五、「儒学伝」)
- (二) 『四庫全書總目提要』には次のような記述がある。
- 瑾字公瑾、安福人。其学問淵源出於朱子。故是書大旨在於發明『集伝』、与輔広『詩童子問』相同。
- (三) 劉錡晒は明の『詩経疏義会通』は、劉瑾の『詩伝通釈』の注釈の仕方も内容も吸収したと指摘した。(劉錡晒「劉瑾『詩

伝通釈』的撰述体例与解経方式」、『詩経研究叢刊』第二十五号、二〇一五、二九六頁)

(四) 詩経大全則全襲元人劉瑾『詩伝通釈』、而改其中愚按二字、為安成劉氏曰。(顧炎武『日知録』卷十八)

(五) 当該の研究として、趙沛霖「劉瑾『詩伝通釈』浅説」(『貴州文史叢刊』第四号、二〇〇二)、劉錡晒「劉瑾『詩伝通釈』的撰述体例与解経方式」(『詩経研究叢刊』第二十五号、二〇一五、二九六頁)、崔志博「劉瑾詩伝通釈考論」(『元代詩経学研究』人民出版社、二〇一六)を参照されたい。

(六) 元代までの詩経解釈史については、種村和史「イナゴはどうして嫉妬しないのか?」詩経解釈学史的点描」(『慶応義塾大学日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』第三十五号、二〇〇五、五十五〜五十七頁)、夏伝才「詩経研究史概要」(清華大学出版社、二〇〇七、五十三〜一二一頁)を参照されたい。

(七) 郝永「朱熹詩経解釈学研究」(上海古籍出版社、二〇一四、二十八頁)。

(八) 『漢書』「食貨志下」「一寸二分未満で、規定の寸法にあてはまらず、二つ組にできないものは、一つごと直三(錢)である(不盈寸二分、漏度不得為朋、率枚直錢三)」の訳文は黒羽英男訳『漢書食貨志訳注』、明治書院、一九八〇、一五三頁による。

(九) 『詩緝』の原文は「椽伐杙栗、其連椽之声丁丁」に作る。

(十) 「丁丁」の解釈について、『正義』と『詩緝』の解釈は同じわけではない。『詩緝』の「疏曰此丁丁連椽之。今日、伐木丁丁為声之相応。此丁丁亦為連椽也」によれば、『詩緝』は「連椽之」を、杙を続けざまにうつことと解釈している。『正義』の「此丁丁連椽之、故知椽杙声。故伐木伝亦云、丁丁、伐木声」によれば、周南「兔置」および、小雅「伐木」に於いて、「丁丁」は同じ意味を持っていることがわかる。小雅「伐木」に『正義』は「此丁丁文連伐木、故知伐木声」と言っているので、『正義』は「丁丁」という語は「椽之」の語につながっているから、丁丁」という語を杙をうつ擬声語と解釈している。しかし、『通釈』は『正

義』と『詩緝』との解釈の異なりに言及していないように見える。

〇〇、二五〇～二五四頁)

(十一) 趙長征は清の周中孚『鄭堂読書記』の「誤以鄭箋為毛伝而刪改其語焉」の説に従って、この『毛伝』を『鄭箋』とするべきだと言う。(趙長征校点『詩集伝』、中華書局、二〇一七、四頁) 本稿は趙長征の説に従う。

(十二) 『尚書』「商書」「西伯戡黎第十六」「今我民罔弗欲喪。曰、天曷不降威、大命不摯、今王其如台」。孔安国は「摯至也」と注した。

(十三) 『礼記』「曲礼下」「凡摯、天子鬯、諸侯圭、卿羔、大夫鴈、士雉、庶人之摯匹、童子委摯而退」に鄭玄は「摯之言至」と注した。

(十四) 小序は「雞鳴、思賢妃也。哀公荒淫怠慢、故陳賢妃貞女夙夜警戒相成之道」と言う。朱熹『詩序弁説』は「此序得之、但哀公未有所考、豈亦以諛惡而得之歟」と言い、序の説に賛成した一方で、詩は、哀公について実証する史料がないために、「哀」が悪い諡号であるところから、このような解釈をしているかもしれないという疑いを示した。

(十五) 『論語』「述而第七」「冉有曰、夫子為衛君乎。子貢曰、諾。吾將問之。入、曰、伯夷、叔齊何人也。曰、古之賢人也。曰、怨乎。曰、求仁而得仁、又何怨。出、曰、夫子不為也」に『論語集注』は「武王滅商、夷、齊恥食周粟。去隱于首陽山、遂餓而死」と注した。また、「季氏第十六」「齊景公有馬千駟、死之日、民無德而稱焉。伯夷叔齊餓於首陽之下、民到于今稱之」に「首陽、山名」と注した。

(十六) 譚作文『朱熹詩經学研究』(学苑出版社、二〇〇三、一五九頁)

(十七) 莫礪鋒の分析によれば、『集伝』の「興」は①比喩。②言わんとすることと対立する意味を持つものを比喩的に使うこと。③比喩的な関係ではなく、詩人が目にしたものよって歌い起こすこと。④比喩的な関係でもなく、詩人が目にしたものでもなく、音韻に近い字により歌い起こすこと。⑤句型に近いものによって、歌い起こすことと解釈している。(莫礪鋒『朱子文学研究』、南京大学出版社、二〇

Abstract

A Study of Shizhuan Tongshi: Focusing on Perceptions of Maoshi Zhengyi

WANG, Rui

This paper discussed how Shizhuan Tongshi interprets Shi Jizhuan by referencing Maoshi Zhengyi and presenting its own views from both lexical clarification, contextual comprehension and the interpretation of xing 興 perspectives. Firstly, Shizhuan Tongshi demonstrates the integration of achievements from Tang dynasty Shijing studies into the interpretation of Shi Jizhuan. It becomes evident that Yuan dynasty scholars recognized the close relationship between Maoshi Zhengyi and Shi Jizhuan. Regarding lexical interpretation, Shizhuan Tongshi follows the exegesis of Maoshi Zhengyi and develops its unique annotation approach by combining annotation from Maoshi Zhengyi and annotation from the Song dynasty scholar, Maoshi Zhengyi consolidates various perspectives to strengthen Shi Jizhuan and employs its textual research instead of adhering to Shi Jizhuan 's theories. Additionally, in understanding the meaning of Shijing, Shizhuan Tongshi utilizes interpretations from Maoshi Zhengyi to clarify ambiguous portions in Shi Jizhuan. For the interpretation of xing 興 Shizhuan Tongshi did not entirely ignore conflicting content between Maoshi Zhengyi and its own interpretation. Instead, it selectively incorporates compatible elements from Maoshi Zhengyi. And Shizhuan Tongshi attempted to draw annotations towards its own interpretation, deviating from the original intent of Maoshi Zhengyi. Shizhuan Tongshi based on Shi Jizhuan's explanation while not outright ignore Han-Tang dynasty Shijing interpretations. On the contrary, it explicitly identifies the differences between Han-Tang interpretations and Zhu Xi's interpretations, combining the similarities between both to validate the legitimacy of Shi Jizhuan's interpretation. Shizhuan Tongshi emphasizing the commonalities between Han-Tang Shijing interpretations and Zhu Xi's interpretations, established a new annotation approach by integrating Han-Tang interpretations into Zhu Xi's exegesis. Shizhuan Tongshi also referenced many interpretations of the Shijing from the Song dynasty scholars. How Shizhuan Tongshi referenced interpretations of the Shijing from the Song dynasty scholar, excluding Zhu Xi, would be a future research topic.

Keywords: Shizhuan Tongshi, Shi Jizhuan, Maoshi Zhengyi, Interpretation of Shijing.